

No	7	分類	3-(1)-ア	資料名	こんなこと、あんなこと	学年	5年	領域	特別活動（学級活動）
----	---	----	---------	-----	-------------	----	----	----	------------

1 ねらい

- 自分の意見があってもまわりに同調してしまう心理や行動に気づき、科学的・合理的に物事を考えることの必要性を感じ取る。

2 趣旨

- 科学的なとらえ方ができなかつたり、まちがっていると思っても周りに同調してしまうことが、差別を生み出し、人権尊重の生き方を阻む要因となっている。
- 実際の生活のなかで同様のことがないか見直ししながら、そのような考え方や行動が互いの生き方を狭める結果になることに気づかせる。

3 展開例

学 習 内 容	指 導 上 の 留 意 点
1 「王様の試み」を読み、場面の状況をつかむ。	・挿絵をもとに王様の試みを理解させる。
2 18人の役人は、なぜ黒い剣を選んだのかを考える。	・付き人が次々と「黒いつるぎだ。」と答えたときの役人の気持ちを考えさせる。
18人の役人が、どうして黒いつるぎをえらんだのでしょうか。	
<ul style="list-style-type: none"> ・自分だけちがうことは言えないな。 ・みんながそう言うのだから、自分が誤解をしているのかもしれない。 ・みんなが言うようにしておいた方が楽だ。 	・多数意見に同調してしまう心理を理解させ、それが真実を見失わせてしまうことがあることを認識させる。
3 王様が役人たちに教えたかったことを考える。	
王様が役人たちに教えたかった「あること」とは、どんなことでしょうか。	
<ul style="list-style-type: none"> ・人間には、弱い心やずるい心があることを自覚する。 ・まわりに流されず、自分で判断することの大切さ。 	・自分に弱い心やずるい心がないかどうかを考えさせ、科学的・合理的に物事をとらえることの必要性を認識させる。
4 身の回りの「見直したいカード」を作成し、振り返る。	・自分の経験を出し合いながら、どう見直すか、その場に自分がいたらどうするかを考えさせたい。

4 参考

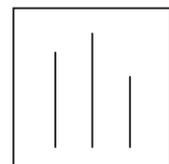
アッシュ（ポーランド出身の心理学者）は、個人に与える同調への圧力を調べるため、視覚的判断の心理学実験のためと称して、7～9名の大学生を教室に集めました。課題は、線分（標準刺激）と同じ長さをもつ線分を（比較刺激）の中から選択させるというものでした。

この課題は、一人で行えば、ほとんど間違わない課題でした。一人の被験者をのぞく残りのメンバーは、実験協力者であり、全員一致で間違った答えを出し続けるのでした。その結果、一人の被験者は、誤った回答をする「多数派」に、約37%が同調していることがわかりました。

また、アッシュは被験者を2名にしたり、終始正しい回答をするように指示された実験協力者を加えた実験も行いました。その場合、一人の被験者の場合に比べて、明らかに同調傾向が下がるという結果を得ています。



標準刺激



比較刺激